

[A0143-01983_001](#)

(表紙)

元治元年甲子

茂昭様御代 下

読合済

[A0143-01983_002](#)

(本文)

一十月十九日 御旅館江諸隊長御呼出今度

従 公辺被 仰出候御軍令条堅相守候様

御意有之御書付ハ御家来方相渡之畢而

於仮御用部屋諸隊長江左之通御家老

酒井与三左衛門書付相渡之

[A0143-01983_003](#)

於 御前御渡

定

一其手并其組を離れ下知なくして

一切罷出申間敷事

但無抛用事有之時者其旨頭々

江相達可任指凶事

一組頭并頭々之指凶ニ ひ私之異見

を立申間敷事

但存附有之候ハ、其筋を以可申達
事

一乱妨狼籍并放火致間敷事

一備押定之如く前後致間敷事

一陣取之儀奉行渡次第異儀ニ及間

敷事

一於陣中馬を放候ハ、為過錢代物

老貫文可取事

[A0143-01983_004](#)

右之条々相背族於有之者速ニ可処

厳科者也仍如件

元治元甲子年十月

於御用部屋

定

- 一 押寄者貝太鼓踏留者鉦可用相凶ハ
- 一手毎ニ貝を以可継事
- 一 先手押行於途中変ル事あら者
貝を以後陣江可告知事
- 一 宿陣之暁一番貝惣手起二番貝
兵粮三番貝諸勢之面々前ニ可揃
打立者貝を以可告知事
- 一 各備堅固相守他備江往来致間
敷事

A0143-01983_005

- 一本陣并諸手横合之敵等有之時者
鉦を以告へし其節踏留り下知を
守り卒爾ニ懸り合申間敷事
- 一出火之節ハ其手切可消下知なくし
て他之手より駈集るへからさる事
- 一陣中乱酒高声致間敷事
- 一物前兵粮番手を分ち片番ツ、食し
可申事
- 一夜討之刻番手之外下知なくして
猥り立騒申間敷事
- 一何れ之手先及合戦候共二手者立堅
可守其期事
- 一私之魁并場所違ひ之働致間敷
事
- 一喧嘩口論致間敷事
- 一博奕賭之勝負堅く禁制之
事

A0143-01983_006

- 一 帰服之敵加憐不可為無礼事
- 一 無断人家江立入并押買堅禁止
之事
- 右之条々堅可相守若於相背ハ可為
曲事者也

元治元申子年十月

一十月廿日御老中稻葉美濃守殿方御呼出

御留守居罷出候処去月二日同五日被指出候御伺書ニ左之通御附札を以御指図有之

- 一 淀川筋并大坂方海上御軍艦拝借并荷物舟水主等御世話被成下候事

- 一 陸地搬運之事
- 一 大坂宿陣所之事
- 一 兵粮并陣具ニ相用候竹木草鞋等ニ

[A0143-01983_007](#)

至迄沿道諸国ニ而用意之事

- 一 大炮拝借之事

并弾薬等并附属道具等之事

右之条々於

公辺夫々御指図被成下候御儀ニ奉存候得共尚又奉伺候以上

松平越前守内

九月二日 島田近江

覚

一 野戦六斤迦灼 十二門

一 同 十二梅忽炮 四門

右弾薬并附属之諸器等御取揃拝

借相願申候

但弾薬八一門ニ付百放之割を以御渡

[A0143-01983_008](#)

弾薬車も御添被下候様

松平越前守内

九月五日 雨森儀右衛門

御書取

初ヶ条御軍艦之儀者追而可相達候事

式ヶ条陸地搬軍之儀者自分手

当之積可相心得候事

四ヶ条兵粮之儀者最寄々々御代官

ニ而取調候筈ニ付其所ニおゐて

指図受差支無之様可致候且又

松明篝火草鞋其外最寄村々江
兼而用意為致置候事二付委
細触面之通可相心得候
五ヶ条大炮之儀者申立之通野
戦炮十六門弾薬附属品共拝借

A0143-01983_009

被 仰付候間御鉄炮玉薬奉行
可承合候事

一十月廿一日左之通総督府江御伺被成候処
即日御附札を以御差図有之

今度長州下之関口討手之指

揮被 仰付候二付而者尤一々

惣督府之御指図可伺候得共差

掛り候儀二而伺候日間無之節ハ

臨機之了簡を以取仕切指図

仕候而不苦御座候哉

御附札

伺之通可仕候

A0143-01983_010

(以下、「」内は抹消)

「一十月廿一日九州筋寄手之諸侯方重役

御旅館江集会軍議有之

松平美濃守様御家老

大音兵部

細川越中守様御家老

小笠原一学

同道

道家角左衛門

松平肥前守様御留守居

中島弥大夫

立花飛驒守殿家老

由布安芸

同道

宮川藤三郎

小笠原左京大夫殿家老

[A0143-01983_011](#)

喜田村修藏
同道

田中孫兵衛

奥平大膳大夫殿留守居

須田五郎左衛門

小笠原幸松丸殿留守居

志水五右衛門

小笠原佐渡守殿留守居

山田直輔

黒田甲斐守殿留守居

内藤熊藏

小笠原近江守殿

重役留守居共

不参

一十月廿二日御登 城御軍議有之

一十月廿二日左之通御目付方御諸手江申通之

出帆日割

一酒井与三左衛門手 十月廿七日

一御旗本御先立 同断

[A0143-01983_012](#)

一酒井外記手 十月廿八日

一大炮方 同断

右乗組之儀者出帆前日与相心得可申

事

一御座船并御附添船江乗組候御供

之面々具足櫃并鉄炮之類

御乗船前々日迄二中ノ島御屋敷迄

指出可申事

但銘々姓名札相附可申事

一同断之面々蒲団等之儀ハ乗込候

当朝六半時迄二同所迄指出可申

事

但右同断

ノ

御座船并御附添船ニ乗組候面々
家来従者之分ハ御先江為致出

A0143-01983_013

帆候筈ニ付御出帆御当日迄無抛残
置候家来左之通

御家老中老入 家来忝人

御備奉行老入 右同断

御側御用人忝人 家来忝人ツ、

御用人六人 右同断

御奉行老入 右同断

御側向頭取忝人 右同断

御目付老入 右同断

御側物頭老入 右同断

御持物頭老入 右同断

御供頭三人 右同断

御医師三人 右同断

右之通ニ付勤向差支候ハ、夫人足之内を以
手合可申事

御座船乗之面々九拾七人名元

A0143-01983_014

略之

御座船并御附添船共乗組之面
々船入之品心得左之通

一 具足櫃

但具足櫃代り両掛持参候共勝手次第

一 背負櫃ニ而着増等難入分ハ別包ニ致
候而も不苦候事

一 鎗鉄炮之類

一 五幅蒲团老枚ツ、

但小夜着様之ものニ而も勝手次第

右之外無抛少々之品家来乗組

之船江積込候儀ハ勝手次第之事

但積込陸揚等も銘々家来ニ而取斗

可申事



御座船并御附添船之外前後

[A0143-01983_015](#)

船行之面々船入品心得左之通

一具足櫃

但右同断

一鎗鉄炮之類

一五幅蒲団一枚ツ、

但右同断

右之外無抛少々之品船積之儀者

勝手次第之事

但積込陸揚等も銘々家来二而取斗

可申事

↗

一十月廿五日来月二日 御発船可被成旨被

仰出之

(以下、「」内は抹消)

「一十月廿六日細川越中守様方左之通御達有之

小倉援兵

備頭

沼田勘解由

一手

[A0143-01983_016](#)

番頭

志水久馬助

寺尾九郎左衛門

田中八郎兵衛

惣人数二千五百余

右之通八月十六日方出張仕居申候

家老

一手

有吉将監

番頭

式人

備頭

溝口蔵人

一手

番頭

式人

家老
長岡帶刀
一手
細川豊前守
一手

[A0143-01983_017](#)

本陣
舍弟

殿
長岡良之助
一門之内一手

右働人数凡一万内外二茂可有御座哉余之
見込ニ付治定之儀者於小倉可申上候事

十月廿六日

一十月廿八日於 御旅館從 公辺被 仰出

候 御軍令 御下知状并船中法則左之通御張
出有之

御軍令

条々

一今度毛利大膳為征伐進發ニ付旗
下并諸軍勢万事相慎不作法之
儀無之様下々ニ至迄入念可申事
一喧嘩口論堅令停止之若違背

[A0143-01983_018](#)

之輩有之於てハ理非を論せず双方
成敗すへし或者親類縁者之因を
存し或者傍輩知音之好に依り
荷担之族はあるにおゐてハ其科
本人より重かるへきの旨急度は
を申付へく自然容赦せしむるに
於てハ後日相聞なといへとも其主人
重科たるへき事

一軍中相討堅禁制たるへし若止
事を得ず相討する時ハ慥成証人
を立可申事

一先手を指越仮令高名せしむると
いへとも軍法に背く上ハ重科に処
すへき事

但先手江相断すして物見に出へか
らさる事

[A0143-01983_019](#)

- 一 子細なくして他之備江相交る族於
有之ハ武器馬具共是を取るべく
若其主人意儀に及はゞ可為曲事
事
- 一 人数押之時不可脇道之旨堅可申付
若猥ニ通輩者曲事たるへき事
- 一 地形又者敵之機に応し時宜之指揮
可有之間此旨兼而可心得事
- 一 降人生捕候者猥ニ不可殺害候事
- 一 諸事奉行人之申旨不可違背
事
- 一 時之使として如何様之者指遣す
とへとも不可違背事
- 一 持鎗持筒者可為軍役之外長柄
さし置持すへからさる事
但長柄之外持するにおゐてハ主人

[A0143-01983_020](#)

馬廻り壱本たるへき事

- 一 陣中ニ於て馬を取放すへからさる
事
- 一 田畠作毛を苅取或者竹木切り取
事堅令停止附押買狼藉すへ
からす若違輩之族有之おゐてハ
可為曲事事
- 一 小荷駄押ハ右之方ニ付可相通軍
勢に交らさる様兼而より堅可申付
事
- 一 船渡之儀他之備に相交らす一手を
たるへき事
- 一 下知なくして陣払并人返し之儀一切
停止之事
- 一 右之条々堅く可守此旨此外裁下知

状者也

[A0143-01983_021](#)

元治元年十月

御黒印

〜

御下知状

覚

一 御軍役之人馬員数之儀ハ慶安之
度御定之通ニ候得共大小銃ハ増加可致
事勿論ニ候事

但弓隊之儀者勝手次第たるへき事

一 御行列前後之次第堅可相守若

猥なる輩有之二おゐてハ曲事たる

へき事

一 御先手之大名一日代り可相勤候右ニ

准し毎隊之先鋒も申合番代り可

相勤事

[A0143-01983_022](#)

一 押前之時用事有之行列を離れ

候ハ、其趣其筋江相断器械僕従ハ其

場江残し通用事終て速ニ馳付行

列ニ馳付へし若病人有之節ハ

慥之証人相立其筋江断置可申

若証人又者断なくして後れ候者ハ

厳科ニ処せらるへき事

一 押前之時山谷林森等之所ハ敵方ハ

伏兵可有之も難斗候間諸隊心

付通行致すへき事

一 騎馬之者用所有之時ハ必ず馬を脇江

ひかせ用を調へ追付乗へき事

一 馬に沓を懸させ候節ハ道脇江乗かけ

沓を掛本の馬次江並ひ乗へし其後

如前乗入るへき事

一 馬はりつく時ハ後の馬道脇江乗か

[A0143-01983_023](#)

け前の次江可乗其後追付可乗入
事

一乗馬小荷駄共持主之名前何番隊
と申事相記候札立聞之辺江結付可
申事

一軍中におゐて若馬を取り放つ者者
過料を出させ口取ハ其品により可為
沙汰事

一御陣中物静に可致候たとへ何様之
儀有之といへ共下知なくして立騒く
へからさる事

一御宿陣にて毎夜四方江篝火を焚キ
御先手番兵之者二三人にて遠見番
相勤可申篝火の人夫者陣場奉行方
差出薪ハ御代官方指出可申事

但御宿陣四方に限らず毎隊にて焚候も

[A0143-01983_024](#)

不苦候事

一毎夜寝す番ハ一隊を十分一之心得ニ而
寝す番致し巡邏懈怠なく相勤可
申候

但頭支配ハ節々相廻り毎隊之番兵も
是に准し昼夜守衛専一之事

一御陣中火の用心油断あるへからず
尤火事之儀者別而入念取扱昼夜ニ
限らず番兵嚴重付置相守可申若
誤ち有之節ハ曲事たるへき事

一御陣所跡者籠略之儀無之用毎隊
所向隊長之面々急度心付組支配
下々ニ至迄嚴重可申付事

一陣中味方之変を聞或者敵之様子
を聞候者ハ昼夜に不限早速其筋江誰江
可申事

[A0143-01983_025](#)

一夜討并忍之者警衛無油断可相

嗜敵方之様子者昼夜に限らず穿
鑿致し其様子ニ寄指図之次第可有
之間諸向遠見并問者者懈怠なく
相遣し置敵之様子相探らせ可申
事

一 謀書矢文捨文張所有之節ハ
見付候人其儘にて大小御目付江相達
可申事

一 諸向并頭支配者勿論下々に至まで
公用なくして互ニ往来致候儀無
用たるへき事

一 銘々得道具ハ勿論御貸渡し相成
候器械損失有之節ハ早速其筋江
可申出若器械損失の為後れを取
候輩有之ニおゐてハ曲事たるへき

[A0143-01983_026](#)

事

一 落人之儀ハ男女幼少之者に限らず
即刻搦捕指出すへし若隠し置
者有之におゐてハ曲事たるへき
事

一 陣中におゐて伝染病相煩候者有
之節ハ小屋内に指置申間敷早速
其旨其筋江相断薬用手当可申付事
一 御出征中ハ親族之忌服受へか
らさる事

一 但父母之忌ハ三日勤番可相除事
一 毎日々夕七ツ時御本陣におゐて大小
御目付より合詞合印を指向頭支配
主人江申渡し即刻諸向并面々之
頭支配下々之者江申渡すへき事
但時宜ニ依り本文に拘るへからさる

[A0143-01983_027](#)

事

右之条々於違背之族者随料之輕

重可被処嚴科之旨依 仰執達如
件

元治元年十月

因幡守

豊後守

伯耆守

美濃守

備前守

和泉守

飛船中法則

一 船中ハ陸行と違諸事不自由と

可改事

一 食事ハ焚出方方配当に随ひ前

後を争ひ申間敷事

A0143-01983_028

一 何港江入津碇泊候共御指図無之

内猥ニ上陸致間敷事

一 上陸之節頭々引纏列を離れ申

間敷事

一 火之用心第一之事

ノ

蒸気船

船中法則

一 船中ハ陸行と違ひ諸事不自由と

可改事

一 昼夜共二時ツ、士分五人ツ、甲板上当

番之事

一 運用中ハ勿論碇泊中も猥ニ甲板上江

出申間敷事

一 船中食事者三組二分ち賄方方仕向

次第混雑無之用可改事

A0143-01983_029

一 朝起候ハ、一組ツ、甲板上海水ニ而顔を

洗ひ常水ハ口嗽之外猥ニ不可費事

一 何港江入津碇泊候共於指図無之内

猥リニ上陸致へからす事

一 上陸之節者其手頭引纏ひ出入共当
番江相届可申事

一 火之用心第一之事

一 不浄所ハ格別氣を付汚穢不致様

可心付事

↗

一 十月廿八日左之通御張出ニ而諸向江申通候様御目付江

御家老申聞之

御乗船場湊橋小倉屋敷前

一 御座船乗組之面々左之通相心得可

申事

一 一具足櫃并武器類 御乗船前々日

A0143-01983_030

朝六半時迄ニ大和橋詰迄持出可申事

一夜具之分ハ前日朝六半時迄ニ同所迄持出

可申事

但姓名札左之通附指出可申事

御座船入 何之誰

何番

御附添船入 同断

一 御附添船乗組之面々左之通可相心得

事

一 一具足櫃并武器類夜具共 御乗船

之前日朝六半時迄ニ大和橋詰迄持出

可申事

但老艘毎ニ二人ツ、申談番人附置

可申事

↗

一 十月廿八日御諸手乗組船割左之通

A0143-01983_031

酒井与三左衛門手

惣人数七百六拾人

此飛船廿七艘

外ニ四百石積本船式艘

小荷駄方

酒井外記手

惣人数七百九拾壹人

此飛船三拾艘

外ニ六百石積本船壹艘

小荷駄方

四百石積本船壹艘

御旗本

惣人数千五百三拾三人

此飛船五拾貳艘

内六艘蒸氣船附

外ニ千石積本船壹艘

小荷駄方

六百廿石積本船壹艘

[A0143-01983_032](#)

大炮隊

惣人数五百六拾貳人

此飛船貳拾壹艘

外ニ九百石積本船壹艘

小荷駄方

四百三拾石積本船壹艘

一十月廿八日先達而惣督方御達之儀ニ付左之通
被指出之

一纏 四半ニ朱ノ丸地白

一小馬印 黒鳥毛

一大馬印 銀ノ棒上ニ黒鳥毛

一旗 黒地ニ白ノ半月

一大炮方旗「上下白中黒上之白キ処ニ黒ニ而葵紋有」

一袖印 白地ニ黒ノ半月

一使番指物

一指物代り たすき木綿段染

一旗本船印

[A0143-01983_033](#)

(図有り)

一船小印旗 黒地白葵紋上ニ角取紙

一船印 「上下赤中白其処ニ朱ニ而葵紋有」

覚

軍兵并陪卒迄惣人数
七千人
一重役番頭物頭姓名

A0143-01983_034

重役

本多修理
酒井外記
酒井与三左衛門
岡部豊佐
山県克之助
松平貫之助
芦田信濃
大谷丹下
本多源四郎
酒井十之丞
毛受鹿之助
番頭

A0143-01983_035

岡部造酒助
芦田源十郎
宇都宮勘解由
大宮藤馬
中根牛介
渋谷弥税
佐野小太郎
雨森右膳
菅沼重記
斎藤民部
北川亘之助
水野小刑部
磯野左近
飯田主税
富永浜之助
西尾久作
相馬精之進

A0143-01983_037

A0143-01983_036

物頭

秋田長之丞
美濃部八十次郎
大宮左門
花木壯太郎
海福孫八
渡辺早太
高田孫左衛門
大井弥十郎
鈴木平馬
浅井権十郎
真杉所左衛門
中根新左衛門
皆川平右衛門
川瀬次郎右衛門
千本藤左衛門
堀権之助
葛巻庄兵衛
相沢八郎左衛門
梯治部左衛門
笹川藤内
杉浦幸右衛門
掘武左衛門
松原信太郎
大谷儀左衛門
今立五郎大夫
大関麓
蜷川林左衛門
出淵伝之丞
榊原幸八
円乗彦蔵
長谷川八十郎
西尾十左衛門

多喜田藤内
長谷川源之丞
内田閑平
荻野左十郎
八木郡右衛門
田中伝左衛門

[A0143-01983_038](#)

一十月廿九日 御参勤御時節御伺之儀二付
御用番松平伯耆守殿江左之通御届書被指出
之

今度参勤交代之儀以前之通被
仰出候二付而者越前守儀来丑年参
府年二御座候二付参勤時節之儀
此節相伺可申儀二御座候得共征長副
将被 仰付置候儀二付追而成功之上
相伺可申心得二御座候此段御届申
上候以上

松平越前守内

十月廿九日

草尾精一郎

(以下、「」内は抹消)

「一十月廿九日生玉宮江 御参詣夫方尾張様
御旅館并稲葉美濃守殿江被為 入」

[A0143-01983_039](#)

一十一月朔日御用番阿部豊後守殿江左之通
御届書被指出之

越前守儀去月十八日防長為追

討京都表致発途大坂表江到着

仕候此段御届申上候以上

松平越前守内

十一月朔日

千本弥三郎

[A0143-01983_040](#)

(以下、「」内は抹消)

「一十一月朔日小笠原佐渡守殿方左之通御届有
之

覚

一 旌旗小駟等之絵図 一冊

一 軍兵惣数并重役隊長之姓名書取

一 出陣道法防長迄之里数着到之行

程日積書取

右之通申越候依之此段申上候已上

小笠原佐渡守内

十一月朔日

山田謙三郎

軍兵惣数并重役隊長之者姓名申

上候書付

覚

一 惣人数二千四拾三人

但軍兵惣数并隊卒共

内先備人数四百式人

[A0143-01983_041](#)

旗本備人数千六百四拾壹人

船数大小三拾艘

ノ

一 重役并隊々之姓名書左之通御座候以上

家老

百束九郎右衛門

福田連

中沢務

番頭

鳥羽伝兵衛

山口甚五左衛門

鎌田貢

旗奉行

河内泉左衛門

持筒頭

田上忠左衛門

者頭

坂本八郎右衛門

[A0143-01983_042](#)

西脇鏡十郎

百束兵衛
交野六郎左衛門
使番

鈴木伝
大久保乾

倉橋三郎右衛門

横目

牧野乾輔

川上濤次郎

小荷駄奉行

松沢浜右衛門

普請奉行

河野福馬

船奉行

長井西東

大筒頭

稲石角左衛門

[A0143-01983_043](#)

市原次大夫

中村弥太郎

ノ

近習頭

高須金左衛門

佐久間左門

徒頭

春日蔵太

福田嘉蔵

右之外軍議儒者兵士中小姓医師

右筆其外隊長附属役々之者共

召連佐渡守出陣仕候趣申越候依之

此段申上候以上

小笠原佐渡守内

十一月

山田直輔

[A0143-01983_044](#)

世譜 1 1

十一月二日 御旅館鳳林寺 御出陣湊橋方

御船行天保山沖江七半時 御着船同所ニ而
發機丸蒸氣船江 御乗替

一十一月二日今晚方蒸氣船甲板上并御附添
船当番割左之通被 仰出之

乗組之御物頭以下昼夜五人ツ、一時
代り勤番之事

但異変有之節ハ時鐘刻ミ打可申

[A0143-01983_045](#)

事

御附添船当番割

一老艘毎ニ昼夜三人ツ、鉄炮持参

一時代り勤番之事

但異変有之節ハ空炮一発可致事

一十一月三日「八時頃」天保山沖 御発船夜五半時

讚州与島湊江 御碇泊

(以下、「」内は抹消)

「一十一月三日發機丸船將始江左之通被下之

船將

金式千疋

岡田雄次郎

運用方頭取

関沢孝三郎

蒸氣方頭取

岩城貞造

蒸氣方

松田亮蔵

運用方

辻松三郎

[A0143-01983_046](#)

医者

金千疋ツ、

山本清仲

運用方

石川立蔵

蒸氣方

根岸仙太郎

上田保五郎
上田次郎吉
村尾敬太郎

軍艦奉行

奉書袖一疋
近藤兵作

同人悴

金五百疋
近藤岩五郎

小遣

金三步
蒸氣方壺人

金五両ヲ
水夫小頭式人

火焚小頭式人

A0143-01983_047

金壺両ツ、
水夫拾九人

金壺両ツ、
火焚拾三人

右発機丸

御乗船被遊候為御祝儀被下之

一十一月四日「朝五時」与島湊 御出帆「夜五時」芸州御手洗

湊江 御碇泊

(以下、「」内は抹消)

「一十一月四日松平安芸守殿方御通船為御見舞

御使者大久保司馬を以三原酒一樽煎海鼠一

箱被進之」

一十一月五日左之通東光寺江申渡候様寺社奉行

平本但見江御家老申渡之

東光寺

太田家無縁之儀ニ付歎願有之此度

赦被 仰出候折柄ニ付 御憐愍を以

同家代々為回向科年々銀式枚ツ、

被下置候

A0143-01983_048

一十一月五日「六半時」御手洗湊 御発船之処御

伊予灘高波ニ相成候ニ付御附添船之綱被放

之「九時前」伊予興居島江御碇泊

但風模様不宜ニ付今日方七日迄 御碇泊被成
一 御附添船追々興居島江着船致候事

一 十一月六日興居島江 御上陸松山侯旧臣堀内
辰之進方江被為 入 御入湯被成其節左之
通被下之

金千疋 堀内辰之進

同三步 御次通り御馳走

仕候ニ付被下之

同貳朱 興居島庄屋江

一 十一月六日大目付中左之通御廻状来ル

此度長防追討被 仰付候ニ付而者

[A0143-01983_049](#)

右討手之面々并 御進發御供

之向共人数差出候上者

御征伐之為濟候迄者 御機嫌伺其

外都而平常之勤品ニ不及候

十一月

一 十一月八日「四ツ半時」興(ゴ)居島 御出帆御附添船

之内三番船四番船乗組之諸士蒸気船江

乗組被 仰付之

一 十一月九日「朝四時」豊前鶴乃島江 御着船

一 十一月九日左之通被 仰出之

今九日鶴ノ島江 御着船之上

御船ニ而 御一泊候明十日朝

御上陸大橋駅江 御止宿明後

十一日小倉表江 御着陣被遊候旨

被 仰出候間御供之面々 御行列

[A0143-01983_050](#)

調之通一隊々々引纏歩法正敷押

行可申事

但用事有之列を出候節ハ

御軍令之通相心得可申事

一 腰兵糧之事

但御上陸当日之儀者当朝

御船ニ而銘々用意可致事

一大橋 御泊ニ而

御本陣御用之外他行致間敷事

一御泊ニ而御書院番一組并補兵隊

半組ツ、半夜代り 御本陣不寝

番相勤可申事

但半時代り

御本陣内外相廻り可申事

一野羽織胴服用勝手次第之事

[A0143-01983_051](#)

但野羽織下江陣羽織着用之儀も

勝手次第之事

↗

一十一月九日小笠原左京大夫殿江御着御案内

御頼旁御使者御側御用人見習毛受鹿之介

被指遣之

越前守儀今度毛利大膳父子始

御追討之副将被 仰付ニ付長洲

下ノ関口攻手之方江可相向旨惣督方之

御指図を以去ル三日大坂湊出帆今九日

御領分鶴之島江被致着帆候依之明

十日大橋行司村江被致止宿都合

次第御城下江罷越被致宿陣度

候就而者万端宜御頼被申候此段御案

内旁被申入候以上

松平越前守内

十一月九日 毛受鹿之介

[A0143-01983_052](#)

演説

越前守儀今度

公辺江蒸気船拝借被相願被致渡海

度既ニ願濟ニも相成候得共御船無之

觀光丸御船壹艘拝借且手前ニおゐて

松平加賀守様御所持之蒸気船被致

借用人数之分芸州御手洗迄飛船ニ而

相渡し置夫方防洲灘之処敵地切
近之場所故右蒸気船式艘ニ而先
手等何度ニも相渡し候上越前守儀
相渡候心積之処右観光丸御船損
所出来拝借不相成ニ付蒸気船
壹艘ニ而万一先手相渡候節損所
相出来期限ニ後れ候様相成候而者
不相濟儀故万事を開越前守儀
手廻斗ニ而一番ニ御当地江被致着帆

[A0143-01983_053](#)

候事ニ御座候依之先手造営向
之者共も未罷越諸事不都合之儀者
覚悟之事ニ候得共右等之次第故尚
以万端御世話御手数ニ可相成此段
厚御頼申上候様被申付候

(以下、「」内は抹消)

一十一月十日「六半時」御供揃ニ而小船ニ被為 召鶴ノ島江
御上陸「椎田村ニ而御小弁当被 召上夫より」行司村
御本陣江御止宿被成

(以下、「」内は抹消)

「一同日行司村御本陣江御着為御歛左之通御使者を以御到来
細川越中守様方
押懸 五
朝鮮飴一捲
糟漬鱒一桶

[A0143-01983_054](#)

松平美濃守様方
塩雁 二羽 氷砂糖一箱
奥平大膳大夫殿方
鯉節 一箱 御樽代五百疋

一十一月十一日行司村御発駕下曾根村ニ而御小休夕七時
小倉侯客館江御着陣

但御通行筋江細川越中守様小笠原左京大夫殿
小笠原佐渡守殿小笠原幸松丸殿方御馳走人
御警衛人数被指出之

一御着陣ニ付於江戸表御用番江
御届有之

(以下、「」内は抹消)

「十一月十一日御着陣ニ付小笠原左京大夫殿江御使者
御使番ヲ以七千紬三疋塩磨一番被遣之」

一同日御着陣ニ付左之通相勤候様御用人ヲ申渡之

千本藤左衛門

[A0143-01983_055](#)

御広間御取次

葛巻庄兵衛

壺人ツ、

御使番三人

御供頭三人

山形熊之助

御広間御番

御書院番五人ツ、

右昼夜とも一時半替り

一御館外見廻り繁々

補兵隊五人ツ、

右御広間詰昼夜とも一時半替り

一御館外見廻り繁々

一内外御番所当分御目付組御側組ニ而

ノ

十一月十二日左之通飛檄被差出之

以飛檄得御意候毛利大膳追討之

期限相迫候付致会議度候間

[A0143-01983_056](#)

早々小倉表へ御出張可被成候

恐惶謹言

十一月

松平越前守

松平肥後守様

立花飛驒守様

松平主殿頭様

黒田甲斐守様

十一月十二日小笠原左京大夫殿方左之通御届有之

先之手

人数凡五百四拾人

内頭士平士足輕共 百六拾六人

又者人夫共 三百八拾人

二ノ見

[A0143-01983_057](#)

人数凡五百五拾六人

内頭士平士足輕共 百七拾六人

又者人夫共 三百八拾人

二ノ見

人数凡五百五拾人

内頭士平士足輕共 百七拾人

又者人夫共 三百八拾人

本陣

人数凡千弍百五拾六人

内頭士平士足輕共 七百六拾六人

又者人夫共 四百九拾人

殿

人数凡五百四拾人

[A0143-01983_058](#)

内頭士平士足輕共 百六拾人

又者人夫共 三百八拾人

総人数合

凡五千弍百五拾人

十一月十一日松平主殿頭殿御始方御使者ヲ以左之通

御届有之

松平主殿頭家来

柳沢九左衛門

今般毛利大膳父子御征伐被 仰出ニ付

主殿頭先手人数昨十一日豊前国苅田

宿江出張相詰申候此段先御届申上候以上

小笠原佐渡守殿家来

百束九郎右衛門

尾崎嘉右衛門

今般毛利大膳父子御征伐ニ付

[A0143-01983_059](#)

御副将被為蒙 仰私義海路下ノ
 関口方一番手被 仰付小笠原左京大夫
 小笠原近江守小笠原幸松丸与一手ニ
 罷成細川越中守奥平大膳大夫方先
 立可相向旨被仰渡候ニ付追付其表へ
 出陣可仕候依之御用向為可奉伺以
 使者申上候宜御指図可被成下候

奥平大膳大夫殿

菅沼新五左衛門

私義此度長防御追討被 仰出候ニ付

当月十一日迄二攻口江到着可仕旨御達

有之着到可仕筈之处持病之痔

疾指起且又宿駅人高差支之

儀も有之候ニ付出張之義来ル十四日

黒原陣場へ着到仕候手筈御座候

[A0143-01983_060](#)

此段御届申上候

小笠原幸松丸使者

今般毛利大膳父子御征伐ニ付同姓

左京大夫へ附属被 仰付下ノ関方討手

先鋒被 仰出候ニ付先月朔日在所発足

同十二日小倉表へ着陣仕候右為御届以使

者申上候已上

十一月十二日細川越中守様方左之通御届有之

覚

一総人数式千式百五拾人余

内式千余人

八月廿三日当地着到

式百五拾人

十一月五日到着

右之通御座候以上

細川越中守内

十一月十二日

沼田勘解由

[A0143-01983_061](#)

十一月十二日松平肥前守様方左之通御届有之

今度毛利大膳父子始御征伐ニ付肥前守
一手之儀去月十一日筑前国木屋ノ瀬宿江
別紙之通着到仕候此段御届申上候
已上

一 惣兵数八千八百八拾六人

内兵四千六拾五人

船手千四百八拾壱人

夫三千三百四拾人

ノ

外ニ左之通御伺有之ニ付附札ヲ以御差図
有之

今度毛利大膳父子其外御征伐ニ而当地
被遊御出張候ニ付而ハ下之関口寄手之儀
万端御指揮可被下哉

附札

書面之通候事

[A0143-01983_062](#)

一 肥前守儀ハ式番手ニ被 仰付置候ニ付而ハ
攻入期限之儀別段可被相達哉又者
十八日一番手ニ引続攻入可申哉

附札

攻懸り期限之儀ハ惣督府方御達
有之候通故別段不相達候攻入様之
儀ハ軍議之上可及御指図候
一 式番手組合攻入之順次何れ之通

相心得可申哉

附札

軍議之上可及御指図候

一 御軍令之内得物等之御ケ条御座候得共
前々方定之旨も有之大小銃專ニ取用
申儀御座候将又竹木伐取之儀者素り
厳禁仕置候得共時宜ニ依り道橋等ニ
取用申儀御座候間御聞置被下度候

[A0143-01983_063](#)

附札

書面之通承置候

一 老番手式番手攻懸候心得方之儀最
前相伺候処御軍議之上可被及御差凶旨
御付札被下置然処此節御談ニハ乗船場
等見込之処申上候様有之候得共一番手式番
手一同押渡候様ニ而者大軍混雜迎も
於業合出来申間敷既ニ一番手之内ニも
順次被相立候得共勿論順々相渡候儀ニ
可有御座然ハ先以一番手攻懸り口何処
与申処被相定候ハ、随而式番手組合申
合渡振等申上候様仕度奉存候

附札

御書面老番手ハ小倉方東方ニ乗場を
定め攻懸り口其辺ニ有之候式番手ハ
同所西之方ニ而御申合渡振等見込
御相立早々御達可被成候

[A0143-01983_064](#)

一 十一月十二日松平主殿頭殿方左之通御届有之
今般毛利大膳父子御征伐被 仰付候付
主殿頭先手人数昨十一日豊前国苅田宿へ
出張相詰申候此段先御届申上候
一 同日小笠原佐渡守殿方左之通御届有之
先備人数中沢勢いつれ不残到着仕候
此段御届申上候
一 同日奥平大膳大夫殿方左之通御届有之
一 十一月十二日奥平大膳大夫殿方左之通御届有之

一ノ手

隊長老人

二ノ手

同老人

旗本詰

家老式人

側用人

使番 兼老人

後備

A0143-01983_065

隊長 壹人

一ノ手

小銃隊之長 壹人

旗本

同 壹人

用人 壹人

旗本 詰 壹人

旗奉行 貳人

一ノ手

物頭 三人

二ノ手

同 三人

旗本

同 四人

後備

同 貳人

一ノ手

目付 貳人

二ノ手

同 貳人

旗本

同 三人

A0143-01983_066

後備

同 壹人

一ノ手

使番 貳人

二ノ手

同 貳人

旗本

同 三人

後備

同 壹人

一ノ手

惣旗奉行式人

二ノ手

同式人

旗本

同壹人

後備

同壹人

一ノ手二ノ手

旗本大砲司壹人ツ、

一ノ手二ノ手

照準司三人ツ、

同

小銃隊役士四人ツ、

番士

一ノ手五拾人

二ノ手五拾人

旗本六拾四人

後備三拾四人

医師

一ノ手式人

旗本三人

徒士

一ノ手五拾人

二ノ手三拾八人

旗本九拾二人

後備式拾六人

隊長家士五拾人

足輕三百人

中間四百三拾五人

荷持夫八百八拾式人

惣惣人数式千百三拾四人

[A0143-01983_068](#)

世譜 1 1

(以下、「」内は「不用」)

「此度長防御追討被 仰出候ニ付当月
十一日迄ニ攻口へ着到可仕旨御達有之着
到可仕筈之処兼而持病痔疾指起且
又宿駅人馬差支之儀も有之旁出張之
儀来ル十四日黒原陣場へ着到仕候手筈
御座候此段御届申上候

十一月「日不詳」小笠原佐渡守殿方左之通御届有之
一惣人数弍千四拾三人

[A0143-01983_069](#)

但軍兵惣数并隊卒共

内先備人数四百弍人

旗本備人数千六百四拾壹人

船数大小三拾艘

ノ

十一月十三日御着陣ニ付尾張前大納言様御本陣江
為御届芸州表江御使者秋田三五左衛門河津善大夫
被差出之今日小倉出帆

越前守儀去ル三日大坂湊出帆同九日

小倉領鵜ノ島江着船仕夫方陸通り

今十一日小倉表江着陣仕候此段以使者
得貴意候

松平越前守内

十一月十一日

秋田三五左衛門

十一月十三日奥平大膳大夫殿方左之通御届有之

[A0143-01983_070](#)

私儀明十四日着到可仕旨御届申上置処

宿駅指支ニ付一日延引相成明後十五日着

到之手筈ニ御座候此段御届申上候

十一月十三日松平主殿頭殿方左之通御届有之

於京都表着到之期日被 仰出候趣

即刻彼地詰合重役方早追を以申越候処

案外船中風波ニ而及遠着去月廿九日

承知仕候間早速出陣可仕候処領分方

肥後之国江渡海風波ニ而出船相成兼

漸去ル四日先手之人数方操出引纏主殿頭

発足仕十一日渡海之日限二相成申候難所
之渡海場無余儀期日迄到着延引仕候
此段私方御届申上候以上

松平主殿頭年寄

十一月十三日

佐野十郎兵衛

主殿頭方兼而御届仕候通豊前長洲

[A0143-01983_071](#)

豊後高田江先備去ル十日着到仕候然ル処
越前守様当所江御本陣相成候儀及承候間
豊前苅田迄相懸屯集罷在申候此段
御届申上候万事御差込被成下候様

松平主殿頭年寄

十一月十三日

佐野十郎兵衛

十一月十四日小倉侯城内出火二付不取敢た為御見
舞御使者本多門左衛門被指出之

十一月十四日細川越中守様方左之通御届有之

日割

十一月八日

有吉将監

同十日

同人組番頭

同十一日

以下

同人組之物頭等

一将監江致附属候大炮手ハ火輪船

[A0143-01983_072](#)

二而海路方出張いたし候

越中守弟

同十二日

長岡良之助

同十三日方三四日之間

溝口蔵人

并同人備手之面々

一越中守者陣営等相整次第順々

出張之筈候以上

ノ

十一月十四日松平主殿頭殿方左之通御届有之

松平主殿頭出張人数

家老壹人

年寄貳人

[A0143-01983_073](#)

用人三人
番頭四人
物頭拾式人
旗奉行式人

鎗奉行式人
兵糧奉行三人
普請奉行式人
船奉行壱人
武具奉行壱人
目付番主拾式人

一 騎馬以上 九拾騎

但長崎手当且渡海場攻口二付馬数ハ

極々減略仕候

一 侍 百五拾八人

一 歩卒 五百三拾三人

一 陪卒 六拾式人

ノ八百四拾三人

小者式千人余

右之通御座候

松平主殿頭家来

十一月十四日

柳沢九左衛門

[A0143-01983_074](#)

一 十一月十四日奥平大膳大夫殿方左之通御届有之
覚

隊長

一 二ノ手

山崎直兵衛

惣從者小者迄

惣人数六百五拾人

右者十一月十二日黒原陣場江着仕候

一 十一月十四日松平美濃守様方左之通被指出之

一 九州諸侯攻口仕寄之儀次第越前守殿

御手前ニおゐて攻口一手之面々者予メ

御議論可有之儀与被存候事

一 旌旗小印之凶面夫々被差出候様致

度事

一 附紙旌旗等之図面指上申候

一 軍兵之惣数陪臣迄も人数共承知

致度事

A0143-01983_075

附紙軍兵陪臣迄之惣人数壹万

五千人余に御座候

一 御重役并隊々之長姓名承知致度事

附紙重役并隊々之長左之通

家老

黒田播磨

林丹後

黒田大和

浦上信濃

矢野相模

大音因幡

中老

毛利内記

加藤司書

郡左近

目成権大夫

矢野安大夫

櫛橋内膳

A0143-01983_076

野村東馬

久野四郎兵衛

吉田主馬

斎藤忠兵衛

中老次席家門

黒田諸左衛門

黒田惣左衛門

用人

小川主殿

久野一角



十一月十五日松平下野守様御本陣江御出御対顔有之

一同日細川越中守様御家老沼田勘解由小笠原左京大夫殿家老小宮民部御本陣江罷出

軍議有之

一同日小笠原佐渡守殿方御使者を以左之通

[A0143-01983_077](#)

御届有之

佐渡守儀去ル十二日在所表出馬

道中踏込今日着陣仕候旗本人数

追々着到仕不残相揃申候此段

御届申上候以上

小笠原佐渡守内

十一月十五日

尾崎嘉右衛門

十一月十五日小笠原近江守殿方左之通御届有之

覚

家老

喜田村脩蔵

同

藤江奥左衛門

諸士以下徒士迄

百武拾八人

足輕六拾四人

中間四拾四人

[A0143-01983_078](#)

又者

百五拾七人

夫之者

三百人

ノ六百九拾五人

十一月十五日小笠原幸松丸殿方左之通御届有之

今般毛利大膳父子御追討被 仰出候二付

私儀同姓左京大夫江附属被 仰付同人与

一手ニ相成下ノ関方先鋒（鋒）被 仰付先月朔日

在所發足仕播州空津方乗船海路

罷下同十二日小倉表江着陣仕候今度
長防兩國へ召連候人数別紙之通御座候
尤先達而於江戸表御届申上候人数方ハ
猶亦於当地増減仕召連候義ニ御座候
此段御届申上候以上

十一月

小笠原幸松丸

今般長防兩國江出陣ニ付旌旗小印

A0143-01983_079

之凶重役并役々軍兵之惣人数陪
卒迄指出候様先達而於大坂表家来
之者へ御達御座候段承知仕候右ニ付別紙之
通以使者申上候以上

十一月十五日

小笠原幸松丸

長防兩國へ召連候人数之覚

- 家老 式人
- 用人 壹人
- 武者 修行
- 歩行士頭 兼 壹人
- 番頭 式人
- 旗奉行 式人
- 者頭 三人
- 軍目付
- 使番 兼 式人

A0143-01983_080

- 戰士 六拾人
- 軍議役 式人
- 大炮方 八人
- 兵粮方 三人
- 馬脇士 拾人
- 医師 三人
- 祐筆 三人
- 中目付 壹人
- 歩行士 拾人
- 旗小頭 式人
- 足輕小頭 式人

[A0143-01983_081](#)

貝鼓鉦六人
 兵粮下役十人
 小横目三人
 茶方式人
 足輕五拾人
 中間六拾式人
 雜兵四百九拾式人

惣人数七百四拾人余

一十一月十五日小笠原佐渡守殿方左之通御届有之

小倉城下筑前口見付外樹木屋

右佐渡守本陣二御座候以上

十一月十五日

一十一月十六日軍目付御使番多賀鞞負殿岩瀬

内記殿并九州諸侯之内下之関方討手之御方々

重役御本陣江御呼出軍議有之

一十一月十六日夜広島御本陣方御使者岩田八大夫

鈴木大八郎を以左之通御書付二而御達有之

毛利大膳父子事伏罪之姿茂

相頭候二付当月十八日攻懸日限之儀

[A0143-01983_082](#)

重而一左右相達候迄攻掛可被見合
 事

元治元年

十一月十四日

尾張前大納言

但右為御請御使者御使番山田多仲広島

表江被指出之

一十一月十六日長岡良之助様今日御着陣二而為御歛

御使者御使番尾高治部之助被指出之

一十一月十七日松平主殿頭方左之通御届有之

主殿頭儀去ル十一日在所出馬仕秋

街道通行兼而御届申上置候領分

豊後国高田江昨十六日参着之積御座候処

昨晚筑後国犬塚方急飛脚到着仕

候処薩摩肥後両侯御人数出張二而

道路差支何分通行難出来無

抛去ル十四日迄羽犬塚江逗留道路日間

取之間日田街道通行明後十九日領分

高田江到着日積相成候段申越候此段

船方御届申上置候

松平主殿頭内

十一月十七日

柳沢九左衛門

十一月十八日奥平大膳大夫殿方左之通御届有之

覚

一本船壹艘 一乗替船壹艘

一大小船六艘 一獵船八十艘

右之通昨夜国許方着船二付此段御届

申達候猶又筑前国領分深江表方も相廻

筈二御座候相達次第御達可申上候以上

奥平大膳大夫内

島津祐太郎

十一月十八日小笠原近江守殿方左之通御届有之

覚

一大小船 九拾五艘

右之通近江守渡海之節船数御座候

此段御届申上候以上

十一月十八日松平出羽守様方蒸気船御借用二付

乗組之者江左之通被遣之

一樽式ツ

一塩鯛五枚 士分以上江

一密柑壹蔵

一樽式ツ 船中一統江

一塩鯛五本

ノ

一同日立花飛驒守殿方左之通御届有之

一旌旗馬印等別紙絵図面之通り御座候

尤小印体巾指物ニ至迄一切裾黒相用候
 且又小者至迄相印山伏袈裟相用申事
 一軍兵之惣数陪卒迄之人数凡四千七百
 五拾余人ニ御座候事
 一重役并隊々之長姓名別紙名前之通り
 御座候尤其時ニ至り名前相違仕候義も可
 有御座候事
 一出張之道路并在所表方防長迄里数
 左之通御座候事
 一在所方豊前国小倉迄之道路凡式拾八里
 一在所方萩迄海陸四拾六里位
 一在所方山口迄同断位
 一在所表出張方豊前国小倉迄行程六日位
 之日積ニ御座候尤風雨洪水等之節ハ日積
 相違も可仕事

[A0143-01983_086](#)

但重役隊長之姓名略之

一十一月十八日軍目付多賀鞞負殿方左之通御達有之

天野民十郎

原岩金左衛門

内藤平八郎

右之面々昨十七日小倉表へ到着有之候

一十一月十八日阿部豊後守殿御渡之書付左之通大目付中方来ル

野州辺屯集賊徒共之内脱走之者有之信州

路へ罷越候付追討之義最寄之面々江相達置候

得共間道等通行京坂并長州辺江罷越候哉も

難斗候ニ付銘々領分者勿論他領迄も申合厳重

取締向相心得若怪もの有之候ハ、速ニ召捕手向

等致し候ハ、打捨候様可被致候

右之趣中山道東海道北国筋領分有之面々江

[A0143-01983_087](#)

早々可被達候事

一十一月十九日奥平大膳大夫殿御本陣江御出御対

顔有之

一十一月十九日松平主殿頭殿方左之通御届有之

私儀只今領分高田表江着到仕候
為御届以使者申上候以上

十一月十九日

松平主殿頭

先達而御届申上候通去ル四日先手人数

A0143-01983_088

追々操出候処風雨等ニ而在所方肥後

江之渡海出来兼次第相後去十一日

私儀出立筑後国羽犬塚迄罷越候処

諸藩人数込合何分止宿相成兼同所江

一日逗留不得止事日田通通行仕候ニ付

期日延引仕候此段申上候以上

十一月十九日

松平主殿頭

十一月十九日小笠原幸松丸殿方左之通御届有之

今般毛利大膳父子始為討手下之関

渡海之節大小船数都合七十七艘相

用申候此段御届申上候以上

十一月廿日

小笠原幸松丸

十一月廿日松平主殿頭殿方左之通御届有之

松平主殿頭出張人数

A0143-01983_089

家老

板倉八左衛門

侍八人

歩卒壹人

陪卒拾四人

右之通相増申候

十一月廿日長岡良之助様御本陣江御出御対顔
有之

十一月廿日今日長府方使節当湊江着船
之段小倉侯方使者ニ而御届有之

一同日右同断ニ付小倉侯方御本陣為御警衛

番頭矢島津盛依田市郎左衛門人数引纏被

指出候付御酒肴被下之

十一月廿日奥平大膳大夫殿方左之通御届有之

覚

一 獵船 式拾艘

右者此間申達置候筑前国領分深

江表方之分昨日相廻都合船数百八艘

御座候此御御届申上候以上

奥平大膳大夫内

十一月廿日

菅沼新五兵衛

一十一月廿一日松平美濃守様方左之通御伺有之二付

御附札之通御差図有之

美濃守儀二番手被 仰付置候付攻入

候節一番手之兵船等多分之事ニ可有

御座処引続押寄候而者必定混雜可然

就而ハ一番手攻入候程合見斗順々二番手

攻入候心得ニ罷在候尤右攻入方之儀ハ御指図も

可有御座候哉且又二番手攻入候御順

御名前等兼而相心得不置候而者是又

混雜可仕候付攻入方御名順等奉伺候以上

松平美濃守様内

十一月廿一日

藪幸三郎

附札

御書面敵地者海岸ニ而攻口も一道ならさるニ付何れ壺番手式番手

一筋方順々進入二者有之間敷猶攻入口并御順序之儀者御軍議之上可被

相定事

一十一月廿一日細川越中守様方左之通御届有之

今度長防御征伐ニ付越中守儀先鋒被

仰付候付而者差寄備頭沼田勘解由組共

小倉応援として指出置討入之節ハ一之

先手申付二番手私組共出張夫方先手之

人数順々操出引続越中守出馬之筈ニ

御座候処参集期限御取消等之御沙汰

ニ付暫出張見合置候処当月十一日持口江

到着同十八日討入期限等之御達ニ付而ハ

直様出張可仕処折節筑前領内継人馬

一切断来候付俄ニ通人夫等之手配仕其上

小倉路之儀諸藩一同程々出張ニ而松崎
以北駅々指支候様子ニ相聞候付而者不取
敢舍弟長岡良之助儀越中守出馬迄之
間諸事致委任急速主張申付間道
秋月街道を押去十七日小倉表江着
營仕先達而私組共右同様間道を押
到着仕加之備頭溝口蔵人組共今廿一日
以後追々到着之筈ニ而大勢之人数一時ニ
屯集宿營等之手当何分整兼候程之
儀ニ付越中守出張仕候而も差寄落着之
場所も無之候間不得止出張見合居候事ニ
御座候然処今度攻掛日限見合候様との
儀御達も有之候付猶期限被 仰出先手之
員数揃次第出馬之覚悟ニ罷在申候此段御
届申上候以上

細川越中守家老

十一月廿一日

有吉将監

長岡良之助手惣人数
覚

家老壹人

備頭拾壹人

番頭六人

物頭貳拾四人

馬廻り

四百六拾九人

徒士

五百七拾人

陪士

三百貳拾五人

仲間

貳百四拾壹人

雜人

千五百四拾四人

但本行之内大筒手持夫等相加り候事
郡夷則家来

陪士

五拾四人

足輕

四拾八人

仲間

式拾六人

A0143-01983_094

雜人

六拾七人

惣合三千七百四拾八人

右之通御座候尤此許迄召連無用之雜人
持人等取調不申候以上

十一月

有吉将監手惣人数付

有吉将監

番頭六人

有吉将監□五人

物頭式拾式人

馬廻り百五拾人

内八拾人大筒手

徒士三百七拾六人

足輕四百六拾九人

仲間式百拾七人

雜人三百拾七人

A0143-01983_095

有吉将監家来

馬廻り百六拾八人

足輕式百七拾七人

仲間三百六拾壹人

雜人七百八拾人

番頭以下家来

陪臣式百四拾人

足輕式百八拾人

仲間五百六人
雑人千式拾四人

惣合五千四百三拾六人

沼田勘解由手惣人数

備頭

沼田勘解由

番頭四人

物頭式拾式人

A0143-01983_096

馬廻り四百三拾五人

内大筒手九拾七人

徒士三百六拾九人

内大筒手五拾六人

足軽四百七拾壹人

仲間式百拾八人

雑人百九拾六人

沼田勘解由家来

陪士五拾七人

足軽八拾五人

仲間三拾六人

雑人百四拾式人

番頭以下家来

陪士六拾四人

足軽三拾七人

仲間式拾人

雑人百三拾六人

A0143-01983_097

惣合式千式百九拾式人

右之通御座候尤此許迄召連候無用之

雑人持人等取調不申候以上

十一月

一十一月廿一日立花飛驒守殿方左之通御届有之

着陣名前

廿三日着陣

「大組頭家老武者奉行」 十時撰津

大組頭

同

立花熊千代

「家老陣場奉行」

十七日着陣

立花伊賀

廿日着陣

中老

由布蔵人

十八日着陣

番頭

立花参大夫

廿三日着陣

同

問註所七左衛門

同

同

蜂谷一学

十八日着陣

同

由布内記

十七日着陣

用人

京都五六兵衛

[A0143-01983_098](#)

廿三日着陣

物頭

竹迫志津助

同

同

斎藤弥八郎

十七日着陣

「陣場奉行着添」

町野茂兵衛

戦士足輕雑兵共

凡一千五百余

十一月

十一月廿二日松平肥前守様方左之通御届有之

肥前守追々出馬仕候段者最前申上候

通御座候然処豊筑之馱々諸家之御人

数相詰り国許方之里数も格別相隔不

申二付先手操出し順次を以出馬之心得御座候

此段御届仕候様肥前守申付候

松平肥前守内

十一月

伊東外記

最前被相達候廉々取調候処左之通

一 旗本其外惣軍之人数者肥前守出馬
之節御届仕儀候

一 大砲九拾八挺

内野戰銃五拾五挺 攻白砲式拾六挺

海砲拾七挺

一 小銃式千百拾九挺

一 船數百三拾式艘

内異国形船壹艘

大小早船其外百三拾壹艘

一 十一月十一日持口江着到之儀者十月十五日

承知十八日攻懸り之儀者当月七日承知仕候

一 旌旗小印扱又合印別紙之通御座候

松平肥前守内

十一月 伊東外記

但旌旗繪図合鑑略之

一 十一月廿二日小笠原佐渡守殿方左之通御届有之

佐渡守先備同姓左京大夫先備之

相並文司塩浜辺より渡海討入候心

得二申合候此段御届申上候以上

小笠原佐渡守内

十一月廿二日 尾崎嘉左衛門

一 十一月廿三日秋田三五左衛門河津善大夫広島表方帰着

於同所御渡之御書付相達候二付小倉在陣之諸侯

方御家来御本陣江御呼出左之御書付被相渡之

三条実美初五人之輩并右二附属

脱藩之者共請取方等之儀二付此度松平

美濃守初へ申渡候趣者全く追討外之

所置二付下之関口討手之面々ニおゐて

右二倣ひ如何之挙動有之候而者不可

然候間心得違之儀無之様可被相示置

事

十一月

去年脱走いたし是迄長州江滯

在之三条実美初五人之内壱人松平

美濃守方請取預可被申事

但右五人之者美濃守長州より請取方

難行届節ハ有馬中務大輔松平

修理大夫松平肥前守申合兵力を以

速ニ臨機之所置可被有之事

十一月

一十一月廿三日右同断ニ付広島御本陣江左之通

御請書被指出之

三条実美初五人之輩并右ニ附属

脱藩之者共請取方等之儀ニ付此度

[A0143-01983_102](#)

松平美濃守初江御達之趣者全く

追討外之御処置ニ付下之関口討手之

面々おゐて右ニ倣ひ如何之挙動有之

候而者不可然候間心得違之儀無之様

可相示置旨御書付之趣奉得其意候

外ニ為心得御渡被成候御書付之写

四通是又致承知候以上

十一月廿三日

松平越前守

三条実美初五人之内壱人宛松平

美濃守より請取預等之儀ニ付細川

越中守有馬中務大輔松平肥前守江

御達之御書付御廻被成其段今廿三日

夫々申達候以上

十一月廿三日

松平越前守

三条実美初五人之輩并右ニ附属

[A0143-01983_103](#)

脱藩之者共請取方之儀ニ付此度

松平美濃守初江御達之趣者全く追

討外之御処置ニ付下之関口討手之面々

おゐて右ニ倣ひ如何之挙動有之候而者

不可然候間心得違之儀無之様可相示

置旨御書付之趣致承知候右者追
 討外之儀与者乍申請取方之儀ニ付自
 然戦鬪之場合ニ茂及候節ハ攻口之
 儀ニ而追討外共難申且副将之任ニも
 有之其儘閣候様二者難致候条下之関
 口討手屯集之人数を以臨時応援之
 指揮ニも及度心得ニ御座候猶御差
 可被下候以上

十一月

松平越前守

[A0143-01983_104](#)

十一月廿四日細川越中守様方左之通御伺有之
 三条実美初五人之輩并右ニ附属
 脱藩之者共請取方之儀者松平
 美濃守様江被 仰渡之趣有之專御取
 斗ニ相成申儀与奉存候然処近年越中守
 国許方も脱走之者有之生死之境者
 相分不申候得共自然存命仕居此度於
 長州請取方相济又者兵力を以臨機之
 処置ニ及仮令他藩之手ニ入候共直ニ
 此方江御引渡被下候様余奉願置候此段
 可然様御差可被成下候以上

細川越中守家老

十一月廿四日

有吉将監

郡夷則

十一月廿四日小笠原左京大夫殿方左之通御達有之
[A0143-01983_105](#)

口上覚

三条実美初五人之輩并右附属脱藩
 之者共請取方等之儀ニ付此度松平美濃守初江
 申渡候趣者全ク追討外之処置ニ付下ノ関口
 討手之面々おゐて右ニ倣ひ如何之挙動有
 之候而者不可然候間心得違之儀無之様可
 相示置旨昨廿三日御書付を以被 仰渡之候
 条右ハ全御追討外之御所置ニ候間具ニ
 奉得其意候然ニ松平美濃守始於彼地脱

走輩請取方之次第ニ寄り自然戦闘与相成
 即逆徒御誅戮之御発端与相運候茂
 難斗奉存候間若右之場合ニ及ひ候者私并
 同姓佐渡守近江守幸松丸儀者兼而下之関口
 攻懸り之先鋒殊ニ細川越中守奥平大膳大夫
 方先立可相向旨厚キ蒙 御沙汰同姓一統

[A0143-01983_106](#)

何れも一際憤起仕居候折柄ニ付別而右場合
 ニ共及候ニ討入不仕候而者先鋒之蒙
 命候身更ニ不安残念之至奉存候依之
 彼地戦闘之形勢ニ候者同姓一同則先鋒之
 心得を以討入仕度念願ニ御座候間至其期候
 ハ、何卒速ニ討入之御指揮兼而被成下置
 候様奉懇願候以上

十一月廿四日

小笠原左京大夫

十一月廿四日左之通諸向江致通達候様御用人江
 御家老申聞之

別紙御達之趣ニ付而者暴徒之者共

何時小倉地方江罷越不意ニ事を相発

し候儀も難斗候間各厚被申談組支配等へ

も可被申置候事

別紙

三条実美初五人之輩并右ニ附属脱藩

[A0143-01983_107](#)

之者共請取方之儀ニ付此度松平美濃守
 初へ申渡候趣ハ全く追討外之処置ニ付
 下之関口討手之面々おゐて右倣ひ如何
 之挙動有之候而ハ不可然候間心得違之儀
 無之様可被相示置事

十一月

十一月廿四日軍御目付中方左之通御達有之

別紙之通稻葉美濃守より達有之候被

得其意一手之向々江も心得之為可被達置候

十一月

加賀中納言

其方儀病氣ニ者候得共毛利大膳父子
始追討ニ付陸地芸州路之先鋒松平
安芸守板倉周防守阿部主計頭同様被
仰付候間為名代在京之家老長大隅守江

[A0143-01983_108](#)

隊將申付早々發行尾張前大納言殿
御指揮ニ随ひ奮戦候様可被申付候諸事
安芸守始江申合委細尾張前大納言殿江
相伺候様可被申付候

右之通於江戸表加賀中納言江相達候旨申
越候間此段前大納言殿江可被申上候事

一十一月廿四日広島御本陣方御達御書付之趣末之番外以上之面々御本陣へ呼出
為心得御家老相渡之

松平美濃守

去年脱走いたし是迄長州ニ滞在之
三条実美初五人之輩長州方請取忝人ツ、
御自分并細川越中守有馬中務大輔松平
修理大夫松平肥前守江預置筈候間夫々請取
候上引渡方共專被取斗尤受取方難行
届節ハ越中守初申合兵力を以速ニ臨棧之

[A0143-01983_109](#)

所置可被有之候其段越中守初江も申渡
置候事

十一月

三老臣之首級実檢濟之上吉川監物江
差遣候事
三老臣之首級者請取参謀之輩斬首
之儀も承置候五卿之儀も申出之通無遅
引可差出候且右ニ附属之脱藩人之始末も
早々可申達事

一山口之儀ハ新規修築之事ニ付早速破
却可有之事

先達而戸川鉞三郎より申渡候追討之
御主意之趣ニ付吉川監物を以申出候謝
罪之廉々ハ有之候得共猶大膳父子恐入

之次第自判之書面を以早々可申出候

一十一月廿五日

忠直様御配所萩浄土寺江為 御代拝御側向頭取

井上弥一郎并武田三十郎被指遣之

但御世譜為御用跡部又八同道罷越

一十一月廿五日広島御本陣方御使者若井鋏吉ヲ以

左之通御達有之

毛利大膳儀追々謝罪之運ニ相成候付

此上之御所置如何相立御為ニ可相成哉

承度候間重臣之内国論専对方行屈候者

来月五日迄ニ広島表江可被差出候事

但本文見込之趣直ニ被申達度向ハ持

口之兵備を不懈様申付自身軽隊

ニ而広島表江早速罷出可被申達事

一十一月廿八日松平主殿頭殿方左之通御届有之

主殿頭出張人数総勢去廿五日迄

相揃申候此段各様迄御届可申上旨

着到所方申付越候以上

一十一月晦日今度水戸表脱走之浮浪中山道通り

相登り不穩相聞候ニ付板取為御固御先物頭林

勘十郎出張被 仰付之

一十一月晦日右同断ニ付大炮為御用左之面々今庄駅江

出張被 仰付之

宇都宮五郎助 日比登弥太 寺沢四郎

林捨吉 河崎山十郎 大久保虎次郎

厚治与三次郎 波々伯部熊三郎 横山廉弥

山本直次郎 鈴木政太郎

外ニ

野村彦大夫 多喜田熊之助 横山鍊蔵

ノ

一十一月晦日御用番阿部豊後守殿江御呼出御留守居罷
出候処御軍艦御拝借之儀ニ付被指出置候御願書ニ左

之通御附札を以御差図有之

越前守儀毛利大膳御征伐之副將被 仰付候付

御軍艦拝借之儀於京都相願候処御繰合

出来候ハ、拝借可被 仰付候間於摂州勝安房守様

江承合候様去月十二日松平伯耆守様ニ而御指図

御座候ニ付安房守様江承合候処御軍艦御不

[A0143-01983_113](#)

足ニ付御繰合出来兼候段御答ニ御座候然ル処

越前守九州江出張候様被 仰出攻口も海路ニ

相成候故弥以御軍艦無之候而者指支有之候間

猶以於此表御軍艦拝借之儀只管相願

候様申付越候尤此節柄之事ニ候得者早急

拝借被 仰付被下置候様偏ニ奉願上候以上

松平越前守内

十一月六日

千本弥三郎

御附札

書面之趣者此表ニおゐて御貸渡可

相成御船無之候間於大阪伊豆守江相伺候様可仕候

一十二月朔日広島表江御用有之二付御家老本多

修理御側御用人酒井十之丞被指出之今日小倉表

出帆

[A0143-01983_114](#)

(以下、「」内は抹消)

「一十二月朔日奥平大膳大夫殿方使者ニ而左之通御達
有之

五十ノ日

大小砲空放修行致候段御届

一同日小笠原幸松丸殿方使者を以左之通御届有之

尾張前大納言殿方毛利大膳儀追々謝罪之

運ニ相成候ニ付此上之御所置如何相立

御為ニ可相成哉被成御承知度之間重臣之内

国論専対方行届候者当月五日迄ニ広

島表へ可差出旨以御使被仰下奉畏候右ニ付

家来山路太次兵衛与申者広島表へ差出

申候此段御届申上候以上

小笠原幸松丸使者

十二月朔日

島田肇

一十二月朔日立花飛驒守殿江左之通御問合有之候処

[A0143-01983_115](#)

附札之通届有之

一飛驒守何日比迄ニ参集ニ可相成且遅参

ニ付而之事

右者即刻出張之積ニ候得共未夕陣屋

等調兼候故及延引候尤打入之日限御取極

相成候ハ、其期ニ不後出張可致候事

一人数何日頃迄ニ相揃可申哉之事

右者御届申置候通飛驒守先手使者着

陣致居候事

一船軍器等全備候哉之事

右者船軍器高相応ニ相揃置候事

一軍御目付様江も御達申上候様之事

右者承知仕候事

一船之乗場何方之心積ニ候哉并船数等之事

右者当所鑄物師町方乗船可仕事

右之廉々委細者先日撰津方口上ニ而申上候通ニ

[A0143-01983_116](#)

御座候事」

一十二月二日水戸表脱走之浮浪中山道通り相登り

飛驒之方江罷越候趣相聞候付左之面々大野表江出

張被 仰付

御番組并子弟輩

大御番頭

引纏

天方八之丞

組之者

御目付

召連

土屋小六

一十二月四日右同断浪士千人程美濃路方山越ニ而御当

地江向ケ走候趣ニ付難所等断切速ニ討取候様江洲路

出張之御目付江原桂介殿方申来候付銘々致用意御

下知相待候様諸月番江御家老申渡之

一十二月四日所司代松平越中守殿方御呼出御留守居罷出候

処左之通御書付老通御渡有之

袖裏

松平阿波守

[A0143-01983_117](#)

松平美濃守

松平越前守

家来江

常野脱走浮浪共致上京候哉之風聞

二候一橋中納言殿内願有之暫時賜御暇

候間発向中

帝都御手薄二相成候付所々口々并九門御

警衛内外見廻等無油断厳重相心得

候様 関白殿被 命候旨伝

奏衆を以被申聞候事

十二月

(以下、「」内は抹消)

「十二月四日小倉城外水車合藁所出火下陣之御同勢

為御警衛御本陣江罷出

一同日右同断二付小倉本陣之諸侯方御機嫌為伺

御使者来ル

一同日右同断二付小倉侯江為御見舞御使者御使番

[A0143-01983_118](#)

尾高治部之助御人数引纏被指出之

一十二月五日松平主殿頭殿昨日着陣二而今朝御本

陣江御出御対顔有之」

一同日所司代松平越中守殿方御呼出御留守居罷出候処

左之御書付公用人を以被相渡之

松平越前守家来江

常野脱走之賊徒共越前海辺江落

行候哉ニも相聞候其領分可罷通も難

斗厳重手当致し見掛次第不洩打

捕可申万一打洩候ハ、他領迄も附入打

取候様可被致候此段相達候

十二月

一十二月六日脱走之浪士美濃路方山越ニ而大野領江

相廻候趣ニ付左之通江洲出張之御目付江御届

書被指出之

野洲脱走浪士之儀此間御達御座候ニ付
 隣領江も申達夫々手配致置候処美
 濃路方越前国境蠅帽子と申峠を越
 一昨四日晚大野領分秋生と申処江止宿
 可致趣ニ而追々大野表之方江罷通り可申
 様子大野表方申来候依之尚又越前守
 増人数為手当指向候得共此節征長
 出陣中ニ付人数少ニ而行届兼心配致居
 申候尤精々乍少人数手配仕候得共何方へ
 罷通り候哉も難斗御座候此段御届申候
 以上

松平越前守家来

十二月六日

村田巳三郎

一十二月六日右同断探索方注進有之ニ付早太鼓
 早鐘被為打諸向兼而被 仰出之通着具ニ而下馬

御門内江相詰三ノ丸御座所勤之分ハ役所々々江相詰ル
 一十二月六日今朝六時御供揃ニ而内裏并門司辺江
 御乗馬ニ而被為入於速戸小倉侯家来大砲手続
 御覽被成七時過御帰營

(以下、「」内は抹消)

「 騎馬御供之面々

酒井外記

岡部豊佐

芦田信濃

岡部造酒助

大宮藤馬

齋藤民部

飯田主税

渡辺早太

高田孫左衛門

萩原金兵衛

浅井権十郎

御供頭式人

本多門左衛門

荻野左十郎

御近習番頭取壺人

御小姓頭取壺人

御近習番壺人

御小姓壺人

歩行御供

御近習番
御書院番組
御馬方式人
御徒

御小姓
補兵隊
新番組

但騎馬并歩行御供之面々士分陣羽織

勝手次第陣笠裁付着用腰兵糧得

道具致持参候事

一十二月七日松平主殿頭殿方左之通御届書指出之

先達而従主殿頭申上置候手船到着

仕候間為弁用小倉湊江も壺式艘繫置

申度此段御届申上候以上

十二月七日

一十二月七日御用番本多美濃守殿方御呼出御留守居罷出

候処御出陣中ニ付歳暮御拝領物之儀ニ付被指出置候

[A0143-01983_122・123](#)

御願書ニ左之通御附札を以御差図有之

越前守并大蔵大輔江例年為歳暮御祝儀

和宮様 天璋院様方 御使御広敷番頭様を以

拝領物被 仰付難有仕合奉存候然ル処今般越前守出陣ニ付

多人数召連候事故此表ニ居合候家来共人少ニ付

御使被成下候共不敬之至ニ可相成候間乍自由右

御使を以拝領物被 仰付候廉大奥御老女中様奉文を以

拝領被仰付被下置候様奉願度旨兼而申付置候此段各様

方迄御内々相願申候以上

松平越前守内

十二月七日

千本弥三郎

御附札

越前守出陣中ハ越前守并

大蔵大輔江女中奉文を以拝領物

可被 仰付候事

(以下、「」内は抹消)

「一十二月八日今暁宿継を以御目付滝川播摩守殿

織田市蔵殿方

慶永様江左之通御達有之二付御領主方江御人

数操出之儀町奉行平本但見方申達之」

(付紙)

「賊徒共越前路江立越候趣相聞候付船場方

何方へ船路脱出可致も難斗候二而御用之外

一切出船不相成様可申達旨中納言殿被仰聞候

尤酒井飛驒守有馬遠江守土井能登守間部

正治小笠原左衛門佐江ハ右之趣相達候得共

其余右国内領分知行有之向へハ大蔵大輔殿方

可被成御達旨是亦被仰聞候間此段御達候

十二月七日

織田市蔵

滝川播磨守

松平大蔵大輔殿

「重役中」

一十二月九日所司代江御呼出御留守居罷出候所堺町御門

御警衛被 仰付置候処御免之儀御願之趣無余儀筋

二付暫時御免被成候旨御達有之

[A0143-01983_124](#)

但右二付在京之大御番頭松平源太郎御番士

引纏同十三日府中江着

(以下、「」内は抹消)

「一十二月九日脱走之浪士今九日明十日之打ち今庄駅

止宿之旨探索之者相達候二付

慶永様御出馬可被成二付本多興之輔江御先手

被 仰付

一同日有馬遠江守殿人数操出今日東掛所江着陣二付

慶永様方御使者大久保肥馬被遣之左之通演

説之

今晚水落駅御人数御操出被下

候様明十日府中駅迄御操出被下本多

興之助手与御談被下度候」

一同日夜賊徒共御国路江立越候趣二付船場方何方江

船路脱出可致も難斗二付御用之外一切出船不相

成候様御目付滝川播磨守殿織田市蔵殿方御達

[A0143-01983_125](#)

有之二付浦々并川添村々江船留之儀町奉行郡

奉行方申通之

(以下、「」内は抹消)

「十二月十日脱走之浪士為御追討

慶永様御出馬被成府中江御在陣

一同日堺御門御警衛佐竹右京大夫殿江御門渡被成

一十二月十一日一橋様方左之通為御知有之

此度常野脱走之浮浪徒多人數

中山道筋罷登り不容易模様ニ相聞

此上

帝都へ相廻り候様之儀有之候而ハ

御職掌ニ取御迷惑被遊候ニ付江州路辺迄

早々御出張御追討被遊度暫時御暇之儀

御内願之通十一月晦日御参

内之上被 仰出候ニ付一橋様当月三日

江州路御出張被成候

[A0143-01983_126](#)

一十二月十一日長府并清末方之使節小倉江着帆」

一十二月十二日長州方使者先手物頭佐竹三郎右衛門小倉江

着左之通歎願書指出候由ニ而家老小宮民部

御本陣江持参ニ付御落手相成

私家老益田右衛門介福原越後国司信濃

去七月於 輦下騷擾之始末深奉恐入候

右ニ付三人之者禁錮申付御指図を奉待候処

却而過慮ニ相当候儀与奉存此度嚴刑ニ

処し首級奉備 御実檢候并参謀之者

一同斬首申付委細吉川監物を以申上候通

御座候全私父子平常之緩せ罪科難

遁依之寺院蟄居恐懼罷在何分之

御沙汰謹而奉待候以上

元治元申子

十一月

毛利大膳

[A0143-01983_127](#)

(以下、「」内は抹消)

「十二月十三日於小倉士使者宿「大阪屋」江御家老酒井外記

御側御用人毛受鹿之介御目付高田孫左衛門浅井権十郎

堤五市郎罷越長府清末使節江案内申越右使

節罷出左之通口上申述歎願書指出候ニ付外記
 鹿之介請取 御本陣江罷出口上之趣申上再使者
 宿江罷越歎願書御落手被成尚惣督府江被申達
 候旨兩使江申聞之」

一十二月十四日

慶永様方小倉在陣之全軍江為御尋 御直書被成
 候儀ニ付左之通全軍江御家老申渡之

今度長防御征討全軍海上無滯小倉江
 到着且寒氣之時分長々苦勞可致与大儀ニ
 思召此上可抽精忠旨別而山陽之海風相厭候
 事專一二被 思召此段全軍江可申聞旨從
 宰相様被成 御書誠以難有御事ニ候

[A0143-01983_128](#)

(以下、「」内は抹消)

「一十二月十七日細川越中守様方左之通御届有之
 毛利家之儀追々伏罪之姿相顯候ニ付不日山口
 城破却且萩城之体父子謹慎等之実跡為
 御見届督府御名代并監察御発向之筈付
 而者長防御所置筋弥以結句可被為至且又脱走
 五卿之儀も兵力を不用穩に御拔取之御目算
 相立不遠諸軍御解放之御運ひにも相成
 居候哉之処越中守人数之儀者初発小倉為
 応援出張仕八月以来永々滯在其後大勢之
 人数一時ニ参集直様先登之覚悟ニ罷在申候
 処前文之通ニ而最早御討入被申御場合ニも無
 之徒ニ時日を送申候而者国力疲弊を重候迄
 ニ而他日之再挙も無覚束甚以懸念之次第ニ
 御座候將又水府浪人大勢京師ニ押登候趣
 付而者定而從国許御守衛之人数等指登候儀も
 可有之彼是不容易御時節ニ付猶又兵力を

[A0143-01983_129](#)

養往々共致度 公務を奉し申度奉存候間
 八月已来差出置候一手之儀者先達而方大里
 迄押出居必多物永陣ニも相成申候付旁以
 此節蒲生村ニ而到着仕候新手之人数与引

替せ申筈ニ御座候此段御届申上候以上

細川越中守家老

十二月

有吉将監

郡夷則」

一十二月十八日於天徳寺 松栄院様御位牌御出来ニ付
御用番江左之通御届書被指出之

旧冬天徳寺焼失之節

松栄院様御位牌塔頭浄林院江仮御安置

致置其後天徳寺仮普請出来ニ付当

三月同寺へ御遷座仮御安置致置候処

今度越前守位牌普請致出来候ニ付

明後廿日

松栄院様御位牌致正遷座御供養

仕候此段御届申上候以上

松平越前守内

十二月十八日

千本弥三郎

[A0143-01983_130](#)

(以下、「」内は抹消)

一十二月十八日昨十七日浪士新保宿江屯集ニ付追々諸藩之

人数取結討伐之手筈ニ有之候処葉原駅加賀中納言様

御人数出張先江降伏状差出候趣ニ付戦鬪期限暫猶予

之儀御同所様方被仰進候ニ付如何御心得可被成之旨一橋様御本陣江

慶永様方御使者武曾権左衛門横山鍊蔵を以御伺被成

一同日

慶永様方

茂昭様小倉江御着陣被成候御歛為御見廻被遣候御使

御用人永見主膳毛利元蔵「十一月廿九日御国出立」芸州広島尾張

前大納言様江御使者相勤今日小倉江着

一十二月十九日御名代土井能登守殿 西丸江御登 城被成候処

「昨十八日御老中連名之御奉書来ル」於御黒書院溜御老中列座御用番

水野和泉守殿を以左之通御達有之

松平越前守

御力 「備前国雲源代金五十枚」

[A0143-01983_131](#)

毛利大膳家来多人数押而入京迫

禁闕及乱妨候節在京之家来共堺町御門
 内外持場辺ニ於テ粉骨を尽し接戦致し
 賊徒共打取候段達 御聴候処常々申付方
 宜故之儀与一段之事ニ被 思召候依之拝領物
 被 仰付之

右ニ付御礼勤之御伺書被指出候処御出陣中ニ付不及其儀
 旨御差図有之

一十二月十九日常野脱走之賊徒兵器を携へ京地江可
 相登之趣相聞候ニ付小倉表方御家老酒井与三左衛門
 帝都為御警衛被指出之

但右之趣小倉在陣之諸侯方江為御心得御使者を以
 御達有之

一十二月廿日小倉滞陣之全軍江
 慶永様方為御慰勞御酒肴被下之

一同日天徳寺 御位牌所御普請御出来ニ付御開眼并

[A0143-01983_132・133・134](#)

御位牌御遷座御供養有之

一十二月廿一日歳暮為御祝儀 和宮様 天璋院様より
 老女中奉文を以左之通御拝領

和宮様方

銀拾枚

干鯛壹箱

天璋院様方

同断

一十二月廿四日賊徒降伏仕ニ付
 (付紙)

「一同日御用番水野

和泉守殿方御呼出ニ付

御留守居介今村謙吉

罷出候処歳暮御拝領物

之義ニ付被指配置候御伺書ニ

左之通

御附札を以御指図有之

越前守并大蔵大輔江例年

為歳暮御祝儀

和宮様

天璋院様方御使を以拝

領物被 仰付候廉今般越前守

出陣中ニ付御老女中様奉文

を以拝領物仕度段相願候処

願之通被仰出難有奉存候

右御祝儀奉文を以拝領物被

仰付候節御礼勤之儀

越前守儀ハ出陣中諸勤向

御用捨ニ付御礼勤向不仕心

得ニ御座候大藏大輔儀ハ例年

之拝領振とハ御様子も替

候儀御礼勤向之儀如何

相心得可申哉此段各様方

迄相伺置申度候以上

松平越前守内

十二月十三日

草尾精一郎

御附札

飛札差越候様可仕候」

一十二月廿三日於広島御本陣御渡之御書付左之通奥村

坦藏相達之

別紙之趣被得其意下之関口一手之面々江も

心得之為早々通達可有之事

十二月

三条実実初五人当月廿五日頃迄ニ松平

美濃守江引渡候手順ニ運ひ候得共附属

[A0143-01983_135](#)

之暴徒不伏之者も有之候付兵士差向

及説得其次第二より彼等討取実美始

早々可引渡旨毛利大膳より相届候付為

心得相達候事

十二月廿三日

毛利大膳父子服罪之次第第二運ひ候付

長防為見分家老石河佐渡守御目付

戸川鉾三郎差向去ル十四日広島出立致し

追々致巡見事候此段先御心得之為相達候
尤見届濟之段者近日可相達候

十二月

- 一 五卿附属之暴徒討取萩方届之趣ニ付
- 岩国江大島吉之助可被遣訳之事
- 一 暴徒取締之為万一兵力を用候節者

[A0143-01983_136](#)

長府方直ニ副将江為打合手筈之事
右之場ニ至り候とも討手之面々より攻懸
り候儀ニ而者無之万々可致暴発候節之
為相咄置候事

右ニ付九州攻口之諸侯方御家来御本陣江御呼出御書付写壺通ツ、被相渡之
(以下、「」内は抹消)

「一十二月廿四日賊徒降伏被

慶永様御凱陣」

一十二月廿四日為御山狩長岡良之助様方御誘ニ付今暁

八時御供揃ニ而小倉領呼野筋江被為 入夜五時前

御帰營

(以下、「」内は抹消)

「 騎馬御供

本多修理 酒井十之丞

岡部造酒助 宇都宮勘解由

渋谷弥税 菅沼重記

高田孫左衛門 井上弥一郎

[A0143-01983_137](#)

御供頭式人 御近習番頭取式人

御小姓頭取式人

歩行御供

御近習番頭取壺人 御小姓頭取壺人

御近習 御小姓

春御小姓 御書院番一々

補兵隊 新番組

御徒